

# 匠、瑳探訪

③

## カミとホトケ

サクラが満開の4月中ごろ、市内新（しむら・豊栄地区）で修復された掛軸（かけじく）に魂を入れる行事がありました。

この日集まったのは集落の女性たちで、毎月15日に集会所でお経をあげ歓談する仲間たちで

す。女性による講（こう・信仰集団）は安産・子授け・子育てなどを願う「子安講」が中心で、

カミやホトケの縁日にあたる十三日、十五日、十九日、二十三日などに行われることから「ジユウクヤ講」「オサンヤサマ」などと呼ばれています。新地区では集会所ができるまでは、地区内の当番の家をめぐって行われていたそうです。

修復された4幅のうち、2幅は如意輪観音

修復された掛け軸を前に、お経をあげる女性たち

（によりんかんのん）像が描かれ、これはホトケ（仏・仏像）です。子安信仰されるホトケには、子安観音や地藏菩薩（じざうぼさつ）、薬師如来（やくしにょらい）などがあります。ほかの2幅は鬼子母神（きしもじん）とコノハナサクヤヒメノミコトという子安神社のカミ（神・神様）でした。いずれも美しい天女のすがたをしていることから安産・子育てのカミとして信仰されてい

ます。

新地区には、1777（安永6）年にまつられた石造りの如意輪観音像や年代は不明ながらムラの女性集団「女人中」によって立てられた石造仏があり、200年も前から女性たちの信仰が続いています。

この4幅のうち注目したいのが、楽満寺（らくまんじ・成田市巾着）の如意輪観音です。寺の縁起（えんぎ・由緒等）によると、この像は奈良仏師の作で鎌倉時代には頼朝（よりとも）や実朝（さねとも）の夫人に信仰され、明治後半期出版の「香取郡誌」にも、この寺の本尊に安産・子育てを祈願する者が多いと記されています。

寺によると、今でもこの本尊に信仰を寄せる人たちが多く、毎年秋になると、利根川沿岸の集落に「出開帳（でがいちょう）」といって本尊が出向くところで、明治から大正にかけて八日市場方面でも「出開帳」されたそうです。

わが国に仏教が伝来して一四〇〇年余り、人びとの祈りはカミとホトケがとけあって続けられて来ました。明治新政府により、神社と寺院が分離されましたが、この4幅の掛軸はそうしたものを越えて伝えられています。

関八日市場図書館 ☎73・3746